

## 日本の大学院生

@Tokyo

**数** 年前になる。一橋大学大学院で1年間教えていた。

一橋大学の本部は、東京のJR国立駅から徒歩で7分くらいのところであり、大学に通じる並木道の両側にはお洒落なカフェやおいしいレストランが数軒あった。とても落ち着いた町並みで、わたしはすぐに好きになった。

30数年前に、最初に日本に行った時には、宇井純先生の講座を聞いたり、アルバイトとして東京大学に出入りしていた。でも、この時のわたしは、教師として院生たちに接する義務を負

っている。

担当したのは、地球社会学の大学院生たちだった。噂に聞いていたように、この大学の院生たちは優秀である。ゼミの予習もちゃんとやってくる。また理解能力にも優れていた。でも、とても遠慮深いのだ。教師に対して気を使う。具体的には、教師を困惑させるような質問をしなくていい。

教師を困惑させるような質問をしない、という部分は重要な。それまでの主に英語圏でのさまざまな国の大学院生との接触から、教師が回答に窮するような質問をするのが、伸びる大学院

生だとわたしは考えていた。

知識がなければ、おもしろい質問はできないので、院生は勉強する。そしてその問題提起を受けて、仮のものにせよ答えに導きうるヒントを与えようと、教師も勉強する。それが大学院（あるいは学部も含めて）での、理想の教える者と教えられる者の関係だ、と信じる。

最初のうちは、わたしの教え方に問題があるのか、と悩んだ。しかしそれが彼ら彼女らのスタイルだ、とわかりだして肩の荷がおりた。院生たちは、討論となれば、鋭くて有効な考えをどんどんと展開してくれた。やは

りこの大学の院生は優秀だ、と改めて納得した。

教師になんか、遠慮することはないのである。いや、教師というのは、乗り越えるべき存在であろう。乗り越えられて、教師はしあわせだ。

教師とくるみの木は、たたけばたくほどよろしい。

もちろんこれは形容で、教師に具体的な暴力をふるってはいけません（笑）。

学問は、いつてみれば、「知」のレスリングなのだろう、と思う。それゆえ、学問は、スリリングでエキサイティングなのである。☺